

建築家に会いに行く!

第13回
佐久川 一

一級建築士事務所
アトリエガイ

コミュニティー再生の糸口になるような住宅を

佐久川一さんといえば、20代後半から30代にかけて、全国的に有名な建築家グループ「象設計集団」のメンバーとして活動していたことでも知られています。幾つもの建築賞に輝いた名護市庁舎や石川海浜公園など、戦後の沖縄を代表する名建築・公共プロジェクトに広く関わりました。名護市庁舎で採用された、冷房に頼らない自然通風システムは、佐久川さんが同時期に手がけた個人住宅での設計手法を手本にしたもの。石川海浜公園では造形のアクセントに琉球ガラスを多用し、これが琉球ガラスを建築に使う事例の先駆けになりました。



産婦人科診療所&住宅。コンクリートと木造屋根の混構造。写真=兼松



今年2月の寒い日に冬の装いで。写真=兼松

以後は数年間の海外渡航を経て、82年に現在の設計事務所を設立。理想の社会を展望しつつ、「自分が今、最も力を発揮できるフィールドで最善を尽くす」との信念に従い、個人住宅を中心に創造力あふれる作品を残してきました。

「住む人にとっては、身体の一部のように機能して、自然と家族間のコミュニケーションが深まり、どこにいても光と風の流れを感じられる空間になるように。外部環境に対しては、周囲の自然とゆるやかに交わり、社会とのつながりも保てるように。設計の仕事は毎回条件が異なるので、その都度最適な方法を探りしています。そうやってできあがった一軒一軒の家から、住む人の愛や幸せがあふれて地域に広がり、コミュニティー



個人住宅。緑に囲まれた鉄骨とガラスの箱。風と光が巡り、外と内が一体に

を育みきっかけになればうれしいですね。」

地域循環型の家づくりを 目指し 植物の活用法を探る

建築史をひもとくと、名護市庁舎などが建てられたのは、モダニズム(近代主義)が終焉を迎え、地域性や風土が見直され始めた時期。農業の分野でもこの頃

から、地産地消という言葉が徐々に使われるようになりました。そうした時代の渦中であって、建築家として独立した佐久川さんは、新しい価値観を先取りするかのよう



アトリエガイの事務所。半円形の外階段を上った3階

開催したり、竹をテーマにした企画展を実施したり、積極的に情報を発信し続けています。

「できるだけその地域で手に入る材料を使って、地域の人たちの手で家づくりの作業を分担できれば、地域内で経済が回って地域全体が豊かになれる。身近な材料の中では、以前から植物に着目しており、今後もその活用方法を探っていきたいと考えています。」

混とんさを増す社会情勢を横目に、確固たる信念をもって将来を見据え、「自分自信が思い描く理想の建築家像に少しでも近づけるように、まだまだ頑張っていきたいですね」と笑顔で語る佐久川さん。今度はどんな作品や企画を編み出すのか、楽しみは膨らみます。



今年の8月26日に今帰仁村で開催した「土塗りワークショップ」。近隣のパイン畑から掘り起こした赤土で外壁を仕上げる体験をしました

プロフィール

佐久川一(さくがわはじめ)
1947年 那覇市出身
1970年 早稲田大学理工学部建築学科卒業
1975年~80年 象設計集団のメンバーとして活動
1982年 一級建築士事務所アトリエガイ設立

<事務所連絡先>
宜野湾市真志喜3-21-11 3F
tel. 098-897-1379
<http://www.atelier-gaii.com/>